
不幸な僕と魔法少女

朝霧遊水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不幸な僕と魔法少女

【Nコード】

N6981A

【作者名】

朝霧遊水

【あらすじ】

僕は不幸体質だ。勝手に不幸が僕に降り懸かる。そんな僕と自称魔女っ子の話。基本コメディ、根っこはシリアス、時々ラヴ…のはず。

1話：とにかく僕と彼女の出会い

唐突だが宣言する。僕は不幸体質だ。

どれくらい不幸かというと、一日に一回は怪我をしかけるし、一週間に一回は交通事故にあいかけるし、一ヶ月に一回は救急車で運ばれかけ、一年に一回は霊柩車に運ばれそうになる。そもそも名字からして『笛吹^{うすい}』というのが不幸だと思う。中学くらいまではこれだけでからかわれたものだ。しかも名前が幸^{さいち}。せめて『こつ』にして欲しかった。フルネームで書くと『笛吹幸^{うすいさいち}』この名前だけで確かに薄幸だと思う。というか親父殿、母上殿、もう少し考えてから名前付けてください。

でも、あくまで一般人だった。……はずだ。多分。

蝉の鳴き声が聞こえる。うだるような熱気。ベタベタとまとわりつくシャツが気持ち悪い。それから逃れようと寝返りをうつと、真夏の強い日差しが瞼を貫いて刺さる。……最悪だ。目が覚めてしまった。

しょうがないので起き上がる。かろうじて腹の辺りにあったタオルケットを投げる。じんわりとかいた汗は不快感しか示さない。喉もカラカラ。

ベッド代わりの簡易ソファから離れて冷蔵庫の方向へ這って行く。寝起きなのに既に気力はない。HP、MPともにゼロだ。何があっても宿屋に泊まれば翌朝には元気一杯なゲームの主人公たちはマジ強いと思う。二日酔いとかも無縁だ。謎の液体とかで瞬時に回復するし。僕は麦茶を飲んでもいきなり瀕死から復活はしない。多少元気になるくらいには現金だが。

冷蔵庫を開けるとひんやりとした空気が肌を撫ぜていく。気持ち良い。しばらくこうしていたい。でも電気代が馬鹿高くなるから却下だ。キンキンに冷やした麦茶が喉を通る。冷たいものが通ったところから生き返っていくような感覚。一気にボトルの半分くらい飲んでしまった。また、沸かさないといけない。買うのは高い。

暫くすると頭が冴えてくる。時間が経ったからというより麦茶だ。麦茶様様だ。ここはもう麦茶教でも立ち上げるしかない。教祖はもちろん僕だ。お布施で金儲けが出来る。麦茶を称えて金儲けが出来るなんて一石二鳥だ。嗚呼、流石は麦茶。命の水。人類最高の発明。僕以外に信者がいない気もするが、そこは気にしてはいけない。そんなことを考えながら僕は風呂場に行く。もちろん片手には麦茶神を携えて。寝汗をかくから夏は朝風呂が僕のポリシーだ。

熱いお湯が汗を流していく。髪を洗い、体を洗い、洗顔クリームを泡立てる。洗顔クリームはきめ細やかな泡でふんわりと包み込むように顔を洗うのだ。

その時だった。

ピンポン

壊れかけのチャイムが鳴った。こんな朝遅くに誰だろう。僕は友達少ないからどうせ勧誘か何かか。ん、放っておく。それより美しく泡を立てるほうが先決だ。

ピンポン…ピンポン！ピポピポピンポン！

今連打しやがったな？

ピッピピッピピンポン

しかも遊んでやがる。……本気で誰だ？僕の知り合いでこんなこと

をしそうなやつは……いや、心当たりはあるけど奴なら有無を言わず風呂場まで飛び込んでくるだろう。

僕はキュツと栓を締める。濡れた体もそこに拭いて、適当にシヤツを羽織り、ハーフパンツをはく。

「誰かいませんか？つてかいますよね？思いつきり水音させてたくせに、私のこと無視してくれましたよね？」

ドンドンと扉を叩かれる。安アパートの薄い扉だ。穴が開いたらどうしてくれる。

それにしても聞き覚えのない声だ。二十歳にもなっていないくらい少女の声だろう。鈴を振るような声とはこういうことか。

そのくせに言葉遣いは妙に悪かった。しかも自分は思いつきり遊んでいたのは棚に上げている。声から判断する限り面識はないと思うのに。

「かつたるいので、居ないということで納得しておいてください」

「あ、はい。分かりました。……つて、思いつきり返事なさつてますよねっ！？そんなので納得する人がいると思っっているんですかあっ！？」

納得しかけてたのに。

「あなたなら納得してくれるって僕、信じてますから……ふぁ……眠い」

「そんな信頼要りません！それに私とあなた初対面どころかまだ対面してませんからっ！！しかも欠伸っ！？私の存在欠伸以下っ！？」

ツッコミ属性か。

しかも自分の存在地分かっているじゃあないか、優秀だな。

「うん、僕は眠いので。そろそろ寝ますね、おやすみなさい」

「あ、はい。おやすみなさい。……って何度私にツッコミさせる気なんですか！？それにこんな時間に寝ないでくださいよ！11時ですよっ！？あと一時間でタモリさんですよ！？」

むっ、タモリ派か。僕も別にみのもんだ派ではないが。

「しょうがないなあ。いい加減話を進めてくださいよ」

「あなたのせいですよねえっ！？あなたが話し逸らしていったんですよねえっ！？」

「責任転嫁はよくない」

「はい、責任転嫁はよくありませんがこれは確実にあなたの責任ですよっ！？」

ちっ！丸め込めなかったか。

「僕の責任なんて誰がどこで何時何分何秒地球が何週回ったときに言っただんですか」

「何その小学生並みの屁理屈！普通に考えてそうでしょう！？」

「生憎僕はそう思いません……ふわぁ……」

ああ、眠い。今日はバイトも学校もないから一日寝る予定だったのに、台無しだよまったく。

「物凄く自分中心に話し進められたうえ、また欠伸ですか！？といつか少しくらい姿みせてくださいよ！」

僕の追っかけか？もてる男は辛いね。今まで一度たりとも告白なん

ぞされたことはないが。

「僕は謎の秘密結社に身を狙われているかもしれませんが、そう易々と姿をみせられないんですよ」

「何その理由！嘘つくならせめてもっとマシな嘘ついてくださいよ！？」

むう、わがままな。

「しょうがないなあ……」

「あ、やっと……」

「僕は実は呪われた男で、僕を見た人は呪いがかけられるんです」

「さらにありえない嘘ですから！しかも私にはそんな呪いかかりませんって！！私魔女っ子ですし！！！」

ん？今何か聞き捨てならない単語がなかったか？『ま』で始まって『こ』で終わるような、やたらファンタジックな響きの？

「りぴーとあふたーみー？」

「何で英語でしかも平仮名発音！？」

「理由は神に聞いてくれ」

因みに無神論者だが。

「スケールが無駄に大きいですよ！」

「じゃあ、僕の母上様に聞いてくれ」

「母上様っ！？どこの時代錯誤野郎ですか！？」

ノリで言ってみただけだが。

「一般とのズレを自称魔女っ子の君には指摘されたくないなあ」

どっちがイタイかというと、10人中12人は魔女っ子の方がイタイと言うだろう。

「そ、それは暗黙の了解って奴で……」

誰が何を了解するんだか？

「ということで僕はそんな君には顔を見せられません。ああ、そう、うん。呪いかけられるし」

「かけませんって！ってか呪われるような心当たりあるんですか!？」

「ないと思う?多分」

「何で曖昧なんですかー!？」

どうでも良いが叫び続けて疲れないのだろうか。

「この世に絶対なんてないんですよ」

「カッコ良い言葉だけど使いどころ間違ってますよねー!？」

「何が正解か。それは僕自身が見つけていくんだ」

「だから何か違ーうつ!？」

ハイテンションだねえ。元気だねえ。僕は眠くてたまらないよ。やっぱり昨日遅くまでRPGのレベル上げてたのが原因か。

「どうやら僕たちの見解の相違だ。君とはもうやっていけないよ、さようなら」

「だからさり気に追い返そうとしないでくださいよ!」

さりげなかったのか、僕。初めて知ったぞ。

「仕方がないな。玄関先で叫ばれ続けるのも邪魔なんで、とにかく部屋に入ってくださいよ。僕近所づきあいは大切にしたいんです」
「色々矛盾生じてますけど！というか私隣の部屋に引っ越してきた挨拶に来たんですけど！？」

引越し蕎麦はもらえるのかなあ。

「早くそう言ってくださいよ。そうしたら邪険にしませんでしたのに」

「言う暇与えてくださいませんでしたよねっ！しかもやっぱり邪険に扱われてたんですか！！」

そうじゃなきゃ僕だってこんな意地悪しないよ。恐らく。

「細かいことは気にせず、どうぞ」

「細かく……いえ、もう良いです」

僕がドアを開けると、何か諦めた顔の少女が、僕の家玄関先に佇んでいた。

多分少女は世間一般から言う『美少女』ってやつだった。

年のころは17、8だろうか。幼さを残す顔立ちだが、確かな美しさを秘めていた。

たれ目がちな黒い瞳は黒檀を思わせるほど深い黒で、艶がある。それをびっしりと囲む眉毛は長くマツチ棒が乗るのではないかと思うほどだった。薄紅の唇も小さな鼻もどれもが精巧な彫刻のように、美しく一部の狂いもない場所に配置されており、それでも人間味の

ある柔らかな輪郭。背中
の辺りまである黒髪は癖がなく、夜空を流
して固めたかのように黒く、しかしキラキラと輝く。

まあ、最も。そんな美少女は今僕を軽く睨みつけていたのだが。

「そんなに熱く見つめられたら、僕照れますよ？」

「……はあ。はじめまして。隣に引越してきました、あまみやさやか天宮清香で
す」

あ、流された。

少女……清香が軽く頭を下げると、さらりと髪が揺れた。

「ああ、はい。僕は笛吹幸です。……にしても案外普通の名前。格
好も普通だし。つまらん」

清香は爽やかな空色のワンピースを着ていた。ふんわりとした裾が
花の花卉を思わせる。

「人のそういうところに面白みを求めないでくださいよ！……これ
からよろしく願いますね」

「程々に。あ、僕の好物は肉じゃがなので覚えておいて損はないで
す」

「思いつきりたかる気ですか！？」

まあ、自分で作れるけど。

「そうかもしれませんが、そうじゃないかもしれません」

「……もう、良いです。これから、色々……色々とお願います
ね」

何でそこを強調？僕は何もお世話する気はないのに。

僕の心の声に応えるはずもなく、タオルセットを押し付けて、清香は帰っていった。

む、夏にタオルセットは中々良いチョイスだな。やるじゃないか、清香。

まあ、この昼前の出来が。僕の人生の転換期になったのだけど。

2話：僕と彼女の初登校

）
）
）

僕は耳元の携帯を掴もうとする。煩い。

うつすらと目を開けると、カーテンの隙間から夏の鋭い、しかし朝の緩やかな光が差し込んでいた。手の中でまだ騒音を奏でている携帯に目を向けると6時15分。あまり寝た感覚はないが、もう起きる時間だ。

起き上がり本日も殆ど意味を成さなかったタオルケットを投げる。んつと伸びをして、頭を振ると少し覚醒したようだった。後は麦茶様の恩恵で起きられるだろう。

麦茶様が喉を通られて、僕は今なさないといけないことを思い出した。

蛇口を捻って水を出し、米を研ぐ。朝食兼昼食兼夕食のご飯となるはずの米だ。米研ぎ歴十数年の僕は手際よくその作業を終わらせる。水を測って炊飯器にセット。スイッチを入れて風呂場へ向かう。

寝汗を流しすっきりした気分のまま、僕は制服に袖を通す。僕の高校は良くもなく、悪くもなく、進学校でもなく、特に部活に力を入れていないわけでもない、いわゆる普通の高校だった。制服がダサくなかったのは嬉しいことだが。

そのままの格好でエプロンをつける。油がはねると厄介だ。

エプロン姿の現役高校生。なのに全く胸がときめかない響きだ。

手っ取り早く唐揚げと、ほうれん草のおひたしと、玉子焼きを作って昨日の残りの肉じゃがと彩のプチトマトと一緒に弁当箱に詰め込む。我ながら良い出来だ。

そうこうしている内にご飯も炊けた。弁当箱に詰め込んで、冷まし

ている間に弁当の残りでご飯で朝食にする。

……朝っぱらからこんな主婦している高校生は珍しいのではなからうか。

ま、必要に迫られてやっているだけ。料理は嫌いじゃないし。学食を毎日食べているとそれなりに食費はかさむし。

多めに作っておいたおひたしはラップに包んでそのまま冷蔵庫にしまっておく。ご飯もこの気温で腐らないように適当に冷えたところで冷蔵庫に。

「行つてきます」

かばんに弁当と教科書類を何冊か入れて僕は家を出る。もちろん返事なんてないけど。

鍵を閉めると丁度隣の住人……清香も家を出てきたところだった。

で、まあ。清香は非常に見覚えのある格好をしていた。

具体的に言つと白いシャツに赤いリボン。紺色のチャック柄のプリーツスカート。つまり僕の学校の制服。

なぜだか酷く嫌な予感というか、半確信がある。

「あ、笛吹君！おはよう！！」

にこつと清香は笑つてお辞儀をする。さらりと黒髪が流れた。

「……おはよう。それと名前で呼んで」

僕は不幸だけでも『うすい、うすい』呼ばれるよりは、女の子みたいな名前でも『さち』の方がいくぶんかマシだ。

まあ、こんな思考も多少の現実逃避が混ざっていたりするけど。

「はい、分かりました幸君。私も清香で良いです」

嗚呼、なぜこの少女はこんな朝からテンションがやけに高いのでせう？

ふつと僕は遠い目をする。

「分かったよ、清香。……で、何でそんな格好を？」

「学校に行くからに決まってるじゃないですか！」

まあ、その格好で他に行ったらびっくりだ。コスプレならアリ……か？

「それにしても良かったです。幸君が丁度出てきてくれて……まだ道分かりませんし」

……つまり学校まで僕についてくるということか？

「どうしよう、僕白昼堂々女の子にストーカー宣言されました」

「ええっ！？ちよつ、待ってくださいよ！私は下心なく、道が分かりませんから……！」

清香はあたふたと慌てだす。ちよつと面白い。

「本当に？」

「本当に！」

「……本当に？」

じいっと見つめると、清香の視線がバタフライしだす。

「……すみません、多少一緒に学校へ行きたいって気持ちはありました」

案外あっさりと白状したものだ。

それにしても僕と一緒に登校したいって物好きだねえ。

「何で？」

「何でって……何となくじゃ駄目ですか？」

清香は心細そうな瞳で僕を見つめる。わあ、有りもしない良心が疼くよ、その目は。反則技だね。

「レッドカード出すよ？」

「いきなりなんですか！？脈絡ありませんし！」

「僕の中にはしっかりあるから大丈夫」

僕の中にしかないと言う。

「さらにわけ分かりませんからっ！」

「うん、分かってもらう気がないね」

「相互理解は大切ですよ！」

握りこぶしで清香力説。

「じゃあ僕を理解しようとする無駄な努力頑張っ……ふあ、眠い」

やっぱり遅くまでRPGのダンジョン攻略してたのが悪いかな。今日は学校だって忘れてたよ。

「またですか！また私は眠気に負けたんですか！？」
「睡魔さんは偉大な方です」

世の中の安眠は睡魔さんの力なり。麦茶様について素晴らしい方が
もしれない。

「寝てばかりいたら脳味噌溶けますよ！？」

どんなホラーだよ？

「溶けても温度が低くなったら固体に戻るかも？」

「どんな脳ですか！？」

「そんな脳」

大体寝ると溶ける自体で普通でないかと。

「適当に答えてますよね！」

「よく分かったね？」

白々しく、棒読みに。

「当たり前です！」

「僕への愛への所為だね。……ふあ」

「愛じゃありませんし、やっぱりしめは欠伸なんですか！？」

よく理解できてるね。

「どうでも良いけどそんなに叫んでると、無駄に注目集めるよ」

まあ、もう手遅れだけど。そもそも容姿が並みじゃないし。

僕たちは学校まで100mといった地点まで来ていた。当然のごとく学生たちが周りに大量にいる。

で、その中で叫んでいる美少女が目立たぬはずがない。

清香はそれに気付くと、かあああつとほほを染めて俯く。こういうところは美少女しているなあ、と感心するよ。

「じゃあね。職員室は適当に行けばあるから」

「どんな説明ですか！？というか最後まで付き合ってくださいよ！」

声を潜めて、清香は僕に訴える。

「僕は無駄に目立ちたくないし。職員室の場所くらい誰かに聞けば懇切丁寧に教えてくれるよ」

見た目が優秀なのはこういうところが役に立つのだろう。

「じゃあね」

そう言つて僕は先にすたすた歩く。少し振り返ると清香は、僕の助言どおり近くの男子生徒に聞いているようだった。男子生徒の鼻の下伸びまくりである。

と、僕に色んな方向から男子生徒諸君の非難の視線が刺さってくる。どうやらもう十分に目立っていたようだ。予想はしてたけど。

はあ、不幸だ。

「幸！聞いたか！？今日、転校生が来るらしいぞ！！」

僕が自分の席に座ると、僕の机に突進してくる動物が一匹。いや、人間だけど、一応。

「煩いよ光輝^{しつぎ}」

「お前、相変わらず淡泊な……。まあ、良いや」

僕の友達と呼べるポジションに何故かいるのが、この光輝だ。まあ、昔からの付き合いだから仕方ないのかもしれない。それにこいつくらいポジティブじゃなきゃ、僕とは付き合うのは難しいだろう。

「でさ、その転校生つてのが超美少女らしいぞ！」

まあ、確かにアレは美少女だ。ツツコミ系だが。

「へえ」

「予想してたけど反応薄っ！」

「僕が今更オーバーリアクションしたところを想像してみたら？」

光輝があごに手を当てて考え込み始める。こいつはこれが考え込む時の正しい姿勢だと信じて疑っていないらしい。と、光輝の顔色がさっとひき、しまいには小さく震えだす。

「俺が悪うございました」

「分かれば良い」

どんなことを想像したんだか。

「そつだよな！今更幸が『ええ、マジか！？見に行くぜ光輝！』とか言って嫌がる俺を無理矢理職員室まで引きずって行って、美少女

に大興奮して鼻血出して倒れたりしたら、色んな意味で怖いな！」

どんな妄想だ。というか普段は逆の立場だ。

「105%ありえん」

「その端数はなんだ!？」

「消費税」

だから将来は120%とかになるかもしれない。

「何いつ!？そんなところにも消費税はつくのか。恐ろしい」

そして光輝は馬鹿だった。将来こいつが詐欺師に騙されないことを祈っておいてやろう。無駄に幸運だから、大丈夫な気もするが。

「恐ろしさが分かったら、日本消費税を集め隊に捕まる前に席につけ」

どんな団体なのか実態は不明。むしろ消費税を集めているのは国だが。

しかし光輝は並大抵の馬鹿ではない。群を抜く馬鹿さだ。

「そうだな！幸も気をつけろよ!!」

「ああ」

むしろ一番気をつけるべきは、光輝の脳内だったが、そこは放っておいてやった。

「起立ーっ！礼！！」

朝のショートホームルーム。担任の英語教師が号令をかけると、全員頭を軽く前に押し倒すような動作をする。そしてそのまま着席。担任も別にそれを咎めようとはしないし。

「あー、知っている奴もいると思うが、今日は転校生が来た。天宮、入れ」

その一言で僕を除く全員の意識が扉へ向かう。普段は携帯をいじっている奴でも、今は扉を凝視していた。それにしても僕のクラスに来るとは。

ガラガラ…

立て付けの悪い扉が開く。

さらりとした長い髪と、きっちり膝丈まであるスカートをなびかせて入ってきた清香は、自分が注目の的であるのを感じて少しはにかんだ。

そしてそのはにかみにやられた男子数人。ご愁傷様である。一瞬にして男を虜にする女、天宮清香、侮るなかれ。

清香は教壇に上り、僕たちのほうを見てにつこり笑った。

と、またこれで何人かのハートが撃ち抜かれる音が。

しかも本人自覚なさそうだ。性質が悪い。僕には関係ないけど。

「天宮清香です。これから宜しくお願いいたします」

クラスを見回して、もう一度にっこり。
はい、殆ど落ちたね。

『うおおおっ！来た！来たー！！』

僕は読心術など持ってないのに、何故か男子生徒諸君の心の声が聞こえた。

『く、悔しいけど私より美人だあの子……！』

ついでに女子諸君の心の声も聞こえた。

「質問は各自後でしてくれ。天宮の席は……」

僕の隣の席しか空いていないのは目の錯覚じゃないだろう。残念ながら。

「笛吹の隣だな」

「分かりました」

僕の席は一番後ろだ。清香が僕の隣の席まで歩いていると、嫉妬と羨望と恋慕などの様々な視線が突き刺さる。

本人割と涼しい顔だったが。

椅子に座って清香は僕に向かって笑いかける。

「宜しくね、幸君」

いきなりの本名名指し、しかも名前。

僕に殺気が向けられた。

不幸だ。

「幸いいいっ！貴様どういっ了見だあああっ！！」

他のクラスメイトが隣の席に群がる中、光輝が僕につめかかる。襟首はつかむな。地味に苦しい。

「どういっつて？」

「なぜ雨宮さんと親しそなんだ！？この俺を差し置いて！」

光輝を優先させなければならんなんてはじめて知ったぞ、僕。

「しょうがないだろ。昨日隣に引越してきたんだ」

「え？マジ？」

光輝の手が緩んだのを見計らって、その手を払う。

「こんな嘘ついて僕に何の得があるって言うんだよ？」

「そうだな！お前は損得で動く薄情な奴だな！」

……お前が僕をどう思っているか良おく分かったよ。まあ、こいつには悪意は全くないから良いけど。それに否定は出来ないし。

「はあ……。だから別に親しいとかじゃないって。ただのお隣さん」
「毎朝一緒に登校か！？弁当も作ってもらったり、食事と一緒に食べるのかあっ！？」

どんな脳内変換がなされているんだ、お前の中で。大体僕が家事全般得意なことを知っているだろうに。登校は否定できないのが悔しいが。

「違うって。大体僕が自分から誰かと関わると思っの?」

「お前、ま

「えええええっ!？」

光輝の声は隣からの悲鳴とも歓声ともつかない声にかき消される。

「天宮さんって一人暮らししてるの!? 偉ーい!」

「と言っても私は全然……家事も苦手ですし……」

清香は照れる。それがさらに男子のツボにはまっているらしい。心臓押さえてうずくまっている奴までいた。リアクション芸人?

「でも凄い! あっ、お弁当とかあるの?」

「い、一応は」

周囲が一気に色めき立つ。

「……見たーい!」「」

クラス40人殆どの意見が一致した瞬間だった。

清香は困ったような顔をしたあと、諦めたようにかばんから弁当箱を取り出す。

「……見ても後悔しないでくださいよ?」

後悔するってどんな弁当だ。
主夫として僕も多少興味がある。

えいっと、清香が弁当箱の蓋を開ける。とむわわぁんと何とも称しがたい臭いが、つんと鼻についた。何故か目も痛い、耳もおかしい。うっ、と口を押さえてうずくまる奴もいる。どれだけの攻撃力を誇っているんだ、この弁当は……！

見た目もやばかった。消し炭のような黒い物体と、最早食べ物かも怪しいようなぐちよぐちよの物体。何をどうやればこんなことになるのだろっ、ご飯が溶けていた。

……これはもう苦手とかそういう領域じゃない気がしてきたぞ。
男子生徒諸君の願望がガラガラと音を立てて崩れていくような気がした。

清香、無駄に面白いぞお前。

3 話：僕と彼女の昼休み

「一緒にお弁当食べませんか？」

「は？何て？」

僕は聞き返す。

僕を咎められる奴はいないと思う。今日も退屈な午前の授業を消化し、弁当を広げようとした。その時、清香が僕にいきなり言ってきたのだ。

「僕、わざわざ世の男子生徒の恨みを買って、ある日いきなり後ろから刺されたくなどないので遠慮します」

平穩って素敵な言葉だと思う。いや、不幸続きの僕に平穩があるのかと聞かれれば否だが。それでも平穩を愛する心は忘れたくないのだ。まあ、清香に絡まれることも既に『不幸』かもしれないが。

「後ろから刺されるような生活送っているんですか！？」

天然かよ。

「主にあなたのせいでそうなりそうです。ということで関わらないでください。以上」

「私あなたに危害加えるつもりありませんよ！……ちょっと位良いじゃないですか」

そういう問題じゃないのだが。

清香が訴えると、クラス中の視線が突き刺さる。目は口ほどに雄弁。明らかに俺を批判している。

こんな視線の中断る勇氣……というか無謀さを僕は持ち合わせていない。つまり僕の選択肢は一つだけだ。こういう日に限って光輝は学食に食べに行っているし。

「はあ、一緒に食べたらいんだよね」

「はい！ありがとうございます！！じゃあ、早速屋上に……」

我が学校の屋上は解放されている。春や秋はたまにそこで食べる奴もいるが、今は夏休み直前。日差しが一番辛い時期。刺々しい視線の中食べる方がまだマシというものだ。

「……ここで食べれば良いだろ？」

「……駄目ですか？」

うるうる。

生憎僕はそんな視線で心動かされはしないが、僕の背後にたまたまいてしまった岡崎英二くんはそうはいかなかったようだ。何かがクリーンヒットしている。今にも『萌えー』と叫びそうな形相だ。

……こいつわざとやってないか？

またしても断れる雰囲気ではない。

「笛吹！こんな可愛い子と昼食を食べられるんだっ！これ以上何を望むっ！？」

出来ることなら平和と幸福を望みたい所だ。言っても無駄だから言わないけど。

「……よく考える。目の前であの弁当を食べている光景は果たして幸せか？」

聞き耳を立てていただろう、クラスメイト全員が静かになった。
どんな威力だ、弁当。

だが結局、屋上まで連れ出された。理由は『あの弁当を教室で広げられると大惨事になるから』……納得してしまった自分がいる。
はぁ、不幸だ。

しょうがないので、観念して弁当を広げる。
それを見て、清香が歓声を上げた。

「うわぁ……凄いですね！」

「僕としては食材を使って、食べ物じゃないものを作る方が凄いと思うけど？」

そう指摘すると、清香バツの悪そうな顔になる。

「あ、あははは……料理は苦手なもので……」

「そういうレベルか、あれ？」

むしろ人知を越えた力が働いている気すらした。流石は自称魔女っ子……か？何か摩訶不思議なものが作用しているのか？出来ればそうであって欲しい。

「やっぱ、ヤバいと思います？」

「あれがヤバくなければ、世の中のどんな物がヤバいのか僕は分からないね」

つまりヤバさ最上級。

「そんなに!？」

「そんなに」

さらりと返すと清香は落ち込む。

「ううっ……料理も出来ないなんて……魔女っ子失格ですね」

魔女っ子にとって料理は必須科目なのか?意外だ。

「例え料理が壊滅的に下手であっても、生活能力が皆無だろうと、清香には清香の良いところがあるはずだ、多分、きっと、そうに違いない」

「その言葉慰める気ありませんよねっ!？」

本日もナイスツツコミだ。

「そのツツコミがあるから大丈夫だと思うよ」

「私の存在価値ツツコミ!？」

僕はわざとらしく首を捻る。

「他に何か？」

「肯定された!??そこは否定してくれると思ったのに、思いっきり普通に肯定された!??」

反応が一々楽しい。

「じゃあ、違うと思い込んでいたら?」

「思い込みですか！？所詮思い込みなんですか！？」

世界は思い込みで出来ている……のかもしれない。

「うん。……ああ、眠い……」

「毎日どれだけの睡魔さんが襲撃なさっているんですか……？」

僕に聞かれても知らん。睡魔さんに職務質問してくれ。そんなこと出来たらの話だが。

「清香が膝枕してくれたら教えてもらえるかも？」

「ええっ！？脈絡ないですよ！？……別に良いですが」

冗談だったのに、良いんだ？

赤く頬を染めて、清香は膝枕しやすいように足をそろえた。

「冗談だから本気にしないでよ？反応に困る」

「要求しておいてそれですか！？」

だって僕、別に膝枕してもらっても嬉しいなんて思わないし。大体、この炎天下で寝るほど僕は馬鹿じゃない。熱中症になって倒れるなんていう趣味は生憎持ち合わせていないし。

「世の中理不尽なことが一杯あるってことを学べたね」

「幸君が一番理不尽なことを言ってますからね？」

僕なんて存在そのものが理不尽の塊だけど？歩いてればたまたま車が突っ込んでくるようなことが、多々ある程度には。

「ふうん、そう」

「反応薄いですよ!？」

「それが僕の持ちネタだから」

別に本当にネタというわけではないが。僕芸人じゃないし。

「え、そうなんですか？」

清香は天然だった。そのうち悪い男なんかには騙されないか、薄情な僕でも心配してしまいそうになる。

「……人の言葉を疑うってことを知ろうよ」

そう言うと、清香は眉をひそめた。

「何ですか？」

「いつか性質の悪いのに引っかかるよ」

安易に想像できるのが悲しいね。僕は別に清香に関わるつもりはないが、不幸になるのは忍びないし。

「私は騙されても大丈夫ですよ。誰かを信じられなくて怯えるよりは、信じて傷つく方がずっと良いです」

清香は目を閉じて、そつと胸に手を添える。何かを祈るようなその格好を、僕は眩しいものを見るように目を細めて見た。

「そ。まあ、僕には関係ないしね」

「幸君は優しいですね」

……は？

僕があまりにも間抜け面をしていたのか、清香はくすくすと笑った。

「どこでどう思考回路が狂ってそんなとんちんかな答えが出るわけ？」

「幸君、私を心配してくれたんでしょう？ だったらやっぱり優しいですよ」

清香はにこつと笑う。

僕は何となく決まりが悪くて顔を逸らす。

ああ、こいつ苦手だ。光輝と同じ感じがする。どうしようもないお人よしだ。そんなお人よしは尚更、近くにいて欲しくない。

「そういうのって妄想って言っただよ」

「魔法って言うのは想像力が必要なんです」

微妙に話がすり替わってる気がする。故意なのか偶然代わったのかは知らないけど。

「魔法、ねえ」

「あ、その目は信じてませんね？」

清香は少し拗ねたように、僕を睨む。

「普通に『私、魔女っ子なんです』なんて言われて、信じられる奴のほうが少ないと思うけど？」

信じられるのは妄想族くらいじゃないのか？ 僕はこれでも一応一般人だ。不幸だが。

清香も一理あると思ったのか、僕を睨むのを止めた。

「それも、そうですね。実物見ないと信じられませんか」

……なぜか、嫌な予感がする。そして僕のこういう予感には『不幸』なこと、よく的中するのだ。悪いことに限って。

清香はくるりと回って、あたりを見渡す。こんなうでるような夏の日差しの中、屋上に出ている物好きは僕たちだけだった。

清香はそれを確認すると、小さく頷いて僕を見る。

「見てみます？魔法」

そう言って、清香はとても爽やかに笑ったのだった。

「遠慮しとく」

僕は即答する。

さらに面倒なことになりそうな予感がするし。

「でも、見ないと信じられないでしょう？」

「信じる必要性を感じないから、問題なし」

このご時世に魔法なんて本気で信じているような、イタイ人にはなりたくない。

「……いいえ、幸君は信じないと駄目です」

清香はポツリと呟く。

僕が清香を見ると、清香は慌てたように首を振った。

「き、気にしないでください!」

「そう言われて気にしない人間はいないと思うんだけど? どういう意味?」

問い詰めると、困ったように清香は黙り込む。

喋る気なし、か。

僕は小さくため息をつく。ため息をつくときと幸せが逃げるだとか言われているが、僕の場合つこうがつかまいが幸せなんてものごっそりと夜逃げするかのごとく僕の前から逃げているので問題なしだ。自分で言って悲しくなるが。

「……今は、言えません。出来れば、言えないままが良いです」

ここが精一杯だと清香の視線が訴える。これ以上は問い詰めても喋らないだろう。

何だかとてもなく面倒なことになりそうだ。

「ふうん」

「……予想してましたが、やっぱり反応薄っ!?!」

清香に予想される程度なんて僕もまだまだだな。

「それが僕の持ちネタ」

「それ二回目です!?!」

「ネタもリサイクルの時代。地球に優しくエコロジー」

果てしなく棒読みで。

「そ、そうなんですか……って違うでしょう!？」

この頃ノリツツコミが板についていないか？

「ちっ、バレたか」

「そりゃバレますって!」

そうだったのか、へえ。

「ただし、清香の弁当は地球にも人にも優しくありません」

「いきなりそんなこと言って酷いです!？でも否定できないです!」

自覚はアリなのか。一番酷いのは僕より弁当。

「清香の弁当のせいで環境省が視察に来ます。公害指定されます」

「そんなに酷いですが、そこまで言われると流石にショックですよ!？」

「清香は公害を作った元凶者として逮捕、告訴、判決、有罪、死刑、執行……」

「うわ、物凄い勢いで私殺されました!？弁当一個で殺されました!？上訴も何もなしで死刑執行ですか!？」

魔女っ子は案外、日本の政治について知っていた。流石案外普通の名前。普段着黒のローブじゃないし。

「こうなったら公害を消去するしかない」

「人の弁当をさらりと公害って呼び方で固定しないでくださいよ!？」

「真実は受け入れないと駄目だよ?」

胡散臭いほどの爽やか笑顔を発動させる。

「何ですかその笑顔？笑顔で全部流せると思ったら大間違いですよ！？」

ちっ、光輝ほど馬鹿じゃなかったか。

「それは残念。清香の弁当くらい残念」

「何でもかんでもそこに結び付けないでくださいよ！？」

だって、実に残念だし。あれは既に人類の神秘の域だ。

「そこまで弁当弁当言うなら私にも考えがあります！良い機会ですし、弁当消して見せますよっ！」

清香は自分の弁当箱（安全のためにまだ蓋は開けていない）に手を置く。一瞬、光が弾けたかと思うと、何も変化は訪れなかった。

「見てください！」

清香は得意そうに弁当の蓋を取る。

僕は自身の様々な粘膜を保護するために、鼻をつまんでそれを見た。

「……失礼の極みじゃありません？」

「しょうがない」

適当にそう答えながら、弁当箱の中を見る。弁当箱は水洗いでもした後のように綺麗だった。

「おお、臭いもなくなってる」

「着眼点はそこですか!？」

主夫をなめてはいけない。

確かにさっきまで異様なオーラをかもし出していた弁当の中身はなくなっていた。朝にクラスメイト全員でそれがあつたのは証明されているし、さっき持ったら重かった。それを、蓋を開けずになくしてしまうのは不思議だ。

だが、しかし。

「魔法って地味だな」

そう思ってしまった僕は普通だと思う。

「呪文も杖もなしか……」

「それは誤ったイメージですよ。魔法って言うのはれっきとした技術です。集中力を高める時には、そう言った呪文だとか使うこともありますけどね」

清香はにつこり笑って、空に手をかざす。そこからパチパチと火花のようにカラフルな火花が散った。

「だから、不可能なことだってあります。魔法は全能じゃありませんからね。限度だってあります。何かするときに体力って使うですよ?」

なぜこうも僕に説明するのかが分からないながらも、僕はそれを聞く。

「魔法を扱うのは感覚です。魔法使いとか魔女っていわれているのはそれが出来る人です。どうやって、と聞かれても知りません。幸

君も自分が何で座ったり立ったり出来るのか聞かれても答えられないでしょう?」

つまり、出来るものは出来るってことか。

「魔法っていうのは魔力って物を扱う技術です。魔力は空气中に溢れています、使えばなくなります。酸素みたいなものだと考えてくださいね」

酸素、か。

「なければ、死んでしまうのか?」

「はい。皆さん、無意識に使っていますからね。魔法っていうのはその無意識を意識的に使うことです」

そう言われてもピンと来ないが。

「で、それを僕に言う理由は?」

そう切り返すと、雄弁だった清香の口が止まる。

「それは……」

「こあら、幸いいいっ！俺がいない間に天宮さんと二人きりで昼食食べるなんて良い度胸じゃねえかああああっ!」

屋上の扉をぶち破る勢いで、光輝が突っ込んでくる。闘牛を思わせる猛々しさだ。

僕がそれをひらりとかわすれ見事に床とご対面していたが。タイミングが良いのか悪いのか。

「光輝、お前が学食に行ってるから僕が一人になって絡まれたんだ。全面的にお前が悪い」

そう言うと、光輝は呆けた顔になる。額にある床でこすった痕がやけに痛々しいが。

「何いっ！？俺が全部悪いのか！？」

「ああ。俺と清香が二人きりになったのも、清香の弁当が危険物指定されているのも、今日がこんなに暑いのも、地球温暖化が進んでいるのもお前のせいだ」

「さ、幸君……関係ないのが混ざってますよ？」

清香がおずおず声をかけるが、光輝を見くびってはいけない。

「ぬおおおっ！俺ってば罪なお・と・こ」

何が罪といわれれば、そのアホさだろう。

「光輝、その罪を償うためには学食のパンと飲み物を買ってこない駄目だ」

「何！？それで俺の罪は償われるのか！？」

光輝の眼がキラキラ輝きだす。

「ああ」

「行ってくるぜ！」

親指をぐっと突っ立てて、光輝は去っていった。単純で操りやすい奴だ。

「幸君、あの、光輝君でしたっけ……？彼にあんなことさせて良いんですか？」

「良いだろ。本人気付いてないしね」

それは実はとても幸福じゃないか？

「そういう問題ですか？」

「そういう問題。それにお前昼食ないだろ？」

僕は自分の弁当あるから良いけど。

そう言われて清香ははっとする。

「幸君」

「何？」

「ありがとうございます」

別に礼を言われることじゃないけど。というか、言うなら光輝に言えよ。

学食から帰還した光輝が、パシラされたことに今更気付いて僕に怒ったのは別の話だ。

4 話：僕と彼女と謎の男

夕焼けに染まる街を僕は歩く。今日も平穏とは程遠いものの無事に学校を終えた。とにかく生きていることを感謝しておこう。まあ、それは置いておいて。

「僕の3歩後ろをずっと歩いているって、ストーカーに本当になった？」

僕は振り返らずに声をかける。後ろからビクツとした気配が伝わってきた。

「す、ストーカーじゃないですよ！しょうがないじゃないですか、お隣さんなんですし！！」

それにしても、僕が立ち止まると立ち止まって、コンビニに寄ると一緒に入り、出ると急いで出てくるのはいかなものか。というか、ストーカーと言われて否定は出来ないだろ、それ？

「お隣さん、ならコンビニによる必要はないと思うけど？」
「だって、まだ道覚えてないんですよ」

だったらそう言えば良いのに。流石の僕も、迷子に道を教えるくらいはしてやるのになあ。多分。
今日はバイトもないから良いものの、僕がバイトの日だったらいつどうするつもりだったんだろうか。あ、そうだ。卵明日の朝の分でなくなるな……。玉子焼きは弁当の必需品だから……。彩り良いし、場所も埋められるし……。明日確か1000円以上お買い上げで卵1パック66円だったな。肉類も明日買って、今日は残り物を

食べるか。

「野菜炒めにスープで良いか」

野菜庫にはナスとピーマンとキャベツとニンジンと小松菜とレタスがあつたはずだ。あと、豚肉と鶏肉とウィンナーも少しあつたはずだし。豆腐と揚げと昨日の残りの肉じゃがも少しあつたな。

「幸君つてしつかり主夫してますね……」

「一人暮らししてたら、これくらい当然」

清香の方が規定外。と言外に含める。

「あの、幸君。私に料理教え

「却下」

即答。と言うより全部言い切る前に答えた。

食材の無駄、労力の無駄、金の無駄。世界三大無駄が出揃うかもしれない。それに鍋とかも悲惨な末路を辿ることになるだろうし、部屋に臭いがついたら最悪だ。

「ちよつ、ちよつと位良いじゃないですか」

「ちよつとで自分の料理が改善されるとでも？」

改善というより根本から変えたほうがいい気もする。改変か？

「それは……すみません、無理です」

別に僕に謝る必要性はないのだが。

とぼとぼと清香は僕の3歩後ろを歩く。

リン……

不意に、何か澄んだ音が聞こえた。

清香の顔つきが変わる。心細そうな顔ではなく、毅然とした顔。キツと前方を睨むようにして、そのあと左右に視線を滑らせる。

ぐにやりと、空間が捻じ曲がった気がした。慌てて目をこするが、そこはいつもの通学路だ。

だが、何かが違う。空気の臭いが違う？夕立の後の湿った臭いとか、晩飯を準備する臭いとか、草の青臭い臭いとか全部なくなった、無味無臭の空間。異常、だ。

リン……リン……

また、鈴のような音が聞こえた。

清香の表情もどんどん険しくなっていく。ぎゅっと握り締めた拳は、白く骨が浮き出すほどだった。

「やあ……」

どこからか、声が聞こえた。男の声。声から推測すると20代後半か30代前半だろう。低くも鳴く、高くもない普通の声。でも、何

かが拒絶反応を起こす。

ぞわっ、と悪寒を感じた。ねっとりまとわりつくような、声。じわりと、汗が首を伝う。

「どこにいるの!？」

清香が吼える。たった一日と少ししか知り合って間もないけど、それでも清香は少し異常だった。キュツと血が滲みそうなほど唇を強くかみ締め、鋭い眼光であたりを見渡す。

「おお、怖い怖い。私はここですよ」

トンッ

軽い音を立てて、目の前に30代前半の男が現れる。丁寧に撫で付けた黒髪に、ピシッと着こなした黒のスーツ。靴も磨かれており、にこやかな表情に至るまで文句の付け所がない。

普通の男。だけど、その男を見た瞬間嫌悪感が体を巡り抜ける。大體、どこから現れた？

「誰……いや、何だ？」

僕がぼそりと呟くと、男は大仰な仕草で驚いたことを示してみせる。一々馬鹿にしている気がしてならない。

「流石は幸様です。私が普通でないと見破るとは……」

男は優雅に一礼をする。

駄目だ。一々癪に障る。それに、今、変なことを言わなかったか？

「……質問に答えていない。それに『幸様』？」

僕はこんな得体も知れない奴に様付けされる覚えなんてない。僕は一応一般市民だ。

「おや、その小娘からお聞きになられていませんか？貴方様の奇異さと重要さを？」

存外だというように、目を見開く男。

「知る必要のないことは、知らなくて良いです！」

清香が食ってかかる。その瞳には憎悪の光すら滲んでいた。

「……どういうことだ？」

でも僕だって黙ってられない。この状況はどう見ても、僕が話の中心にいるはずだ。それなのに、僕には何のことか分からない。そんなのおかしいだろう？

「知りたいですか？私と一緒に来ましたらお教えしましょう」

「駄目です、幸君！」

男が手をさし伸ばし、清香が僕の服を掴む。

「知らない男の人にはついて行くなといわれているので、遠慮します」

「幸君待って、何歳児ですか！？」

いかなる時もツツコミを忘れない清香だった。僕もボケられている

からまだ余裕があるってことだろうけど。

男は、それを見てくつくつ笑う。

「ふふふ…… 幸様は面白い方ですね。失礼しました、黒須くろすと申しま
す。お気軽にクロちゃんと呼んでくださっても結構ですよ」

30 過ぎのおっさんをクロちゃんと呼ぶ勇氣は僕にはない。

「ついでに私は魔法使いですよ」

僕の回りにはこういう奴ばかり来るのか。
はぁ、不幸だ。

「おや、これには驚かれないんですね」

男がにこにこ笑う。

「自称魔女っ子が隣にいるからね」

「それは言っているですねえ……。さぁ、幸様。自己紹介も済みま
したし行きましょう」

今の紹介で分かったことといえば、名前とイタイ人ってことだけだ
ろう。

「母さんの遺言でクロスケにはついて行くなと言われているので、止めときます」

「幸君、クロスケって誰ですか!？」

些細なボケも見逃さないか。僕が見込んだだけあるな。

「幸様の母上殿はご健在でしょうか?つい昨日も安売りを求めて隣町まで自転車こいでらっしゃいましたよ」

この頃僕の周辺で、『ス』から始まる犯罪が急増している気がする。

「僕のプライバシーとか考えませんか？」

「人間誰だって誰かのプライバシー侵害しながら生きてますよ」

ある意味真理だが、間違っている。

「……はあ、不幸だ」

いつものように、呟く。

男……黒須が、にやりと笑った。
肌が粟立つ。

「幸様は不幸ですか?不幸でなくしてさしあげましょうか?」

清香の顔色がさつと変わる。顔面蒼白とはこういうことだろう。ただでさえ白い肌からさらに血の気が引く。

「聞いたら駄目です!」

でも、黒須の言葉は僕の心を刺激した。

もし、本当にそんなことが出来たのなら……。

「僕は……どうすれば良い？」

「幸君！？」

清香がさらにきつく、服を握り締める。

僕はそれを払った。

清香が驚いて僕を見上げる。

「簡単ですよ。私達には幸様が必要です。幸様が私と共に来られるなら、不幸などなくしてみせましょう」

……正直、うさんくさいことこの上ない。だが、魔法なんて物を使えるなら、僕だけではどうしようもないこの体質もどうにかなるのかもしれない。

どうする？このまま不幸を背負って生きるか、万が一の可能性にかけてみるか。

「僕は……！？」

答えを口にしようとした瞬間、体が後ろに引かれた。清香が僕の腕を強く掴んでいる。華奢な体からは考えられないほどその力は強く、痛いほどだった。

「幸君、逃げますよ！」

「待てよ！僕は

「幸君は死にたいんですか！？」

え？

思わず足が止まりそうになるが、さらに引っ張られる。

「いえ、幸君は殺されはしませんけどね。精神を殺された、言うことを聞くだけの人形のようにになりたいんですか？」

わけが、分らない。ただ、清香の必死さからそれが妄言の類ではないだろうと思う。

僕も、清香に引かれるまでもなく走り出す。僕は頭脳労働のほうに得意だけど。

それにしても。

「僕『は』殺されない？」

「……はい。まあ、私は邪魔をするなら殺されるでしょうね」

さらりと何でもないように。淡々と清香は語る。それがその言葉が事実であると示していた。

リン

また、鈴が鳴る。

「逃がしませんよ」

また、男がどこから現れる。清香が歯噛みした。

「気付いていらしてませんでした？ 幸様達は私の結界に囚われているんですよ」

あの気持ち悪い感覚は、それだったのか？

対等に話しているフリをしながら、策を巡らしていたのか。

「……清香、どうすれば良い？」

魔法なんて僕の専門外だ。

清香は小さく何か呟く。

『幸君、聞こえますか？聞こえるなら心の中で聞こえると答えてくれれば宜しいです』

突然、頭の中に直接響くような声が聞こえた。

『聞こえる。何これ？』

『えっと、テレパシーみたいなものだと考えてください。察していると思いますが、これは私達二人にしか聞こえません』

案外普通に魔女っ子してるな。感心感心。

『そんな感心しないで良いですよ！？』

ああ、そうか。考えてることが全部伝わるんだな。映像を思い浮かべたら、それも見れるのだろうか？

『そんな実験今しないで良いですから！』

好奇心は人類の至宝なのに。

『TPOわきまえて下さい！』

そつえば最近までTPOをPTAの親戚だと光輝は勘違いしてい

たらしい。

『全く関係ありませんね!?!』

毎度ツツコミご苦労様。

『労わるなら態度で示してくださいよ!』

物品をねだるのか? せこいなあ。

『誰もそんなこと言ってますしね?!』

正しくは思ってたろ?

『そうですけどそんな細かいこと気にしないでください』

細かいこと気にしていると大物芸人になれないよ。

『芸人になる気はありません!』

え、そのツツコミを生かさないとどうするの?

『だから、魔女ですって! 芸人なんて嫌です!』

あ、今芸人馬鹿にしたな。全国五千万人のお笑い好きに土下座しなさい。

『多っ!』

まあ、実際そんなに居るか知らないけど。

『適当ですか!?!』

さて、いい加減漫才止めるか。

『幸君のせいですからね!?!』

「……さつきから百面相していて楽しいですか?」

黒須が清香に呆れた声を出した。

僕も見ていたが、相当怪しかった。

『だから、幸君が……いえ、もう良いです。とにかく、合図を出したら真っ直ぐに走ってください』

諦めたみたいだ。つまんないなあ。

『そういう問題じゃありません!わかりましたか?』

『分かってるけど、どうせ結界から出られないんじゃない?』

さつき結構な距離を走ったし。結界と言うくらいだから、出られないように工夫されているんじゃないか?

『そこは、安心してください。ただ、壁のようなものにぶつかったら、壁に手を当ててください。そうすればどうにかかります』

清香の声……じゃないけどそう定義しておく……には確信が籠っていた。

僕はかすかに頷く。

「清香はちょっとお頭弱い子なんで、放っておいてあげてください」

「酷い言い草ですね!？」

黒須にそう答える。

冗談だって。黒須が不審に思わないようにだって。

『なら良いですけどね』

多分、そうだと思うよ。

『自分のことにすら曖昧ですか!』

うん。まあ、僕も清香のことは放っておいてあげよう。

『酷いです!』

黒須は、また笑う。

清香、馬鹿にされてるぞ。僕のせいだけど。

『自覚あるんですよ……』

何かやたら哀愁漂っていた。

それよりそろそろ逃げない？

『そーですね』

笑っていとも並みの適当な『そーですね』だった。伏字が殆ど意味を成していないのは、それこそ伏せておく。

清香は小さくため息をついて、黒須を睨み上げる。黒須も視線を感じたのかふつと清香を見た。

『走ってください！』

そう聞こえると同時に、清香は右手を天にかざす。
僕は二人とは逆の方向へ走り出した。

「幸様、逃げても無駄ですよ？」

黒須の声がどこからか聞こえる。
どこに居る！？

『惑わされないでください！結界内にいるから近くに聞こえるだけですよ！！』

実際は清香の前に居るってことか。
僕はそつと後ろを振り返る。

じゅわあ……つと水が蒸発する音。水蒸気に霞んで、遠目にはキラキラとした光が見えるだけだ。何となく清香が劣勢の気がする。
早くしなければ！

僕は必死に足を動かす。肺が焼けたようで、喉がヒリヒリするようだった。それでも足を止めない。

やがて、景色が変わっている場所に出た。今までの変哲のない町並みがひたすら続くのではなく、人が行き交う道。そこに行こうとした僕は柔らかい壁のようなものにぶつかった。クッションのように衝撃を吸い込むが、割れない見えないもの。

清香に言われたようにそれに手を触れさせる。

ぐにやりと、空間が変わった。同時にパリンと何かが割れるような音。

「……残念ですが、今日は引きます。また、会いましょうね」

黒須の声がどんどん小さくなっていく。

「貴方の気が変わるのをお待ちしていますよ、幸様」

ぷつりと、黒須の声が聞こえなくなった。

「くっ……はあっ……！」

苦しそうな喘ぎ声に振り返ると、清香が肩で息をしながら歩いている。少し怪我でもしたのか、左足を引きずっている。

「大丈夫……じゃなさそうだね」

「い、いえ……だいじょ……う、ぶです」

これのどこをどう見れば大丈夫に見えるというのか。

……心の声も聞こえない。相当無理しているんだろう。

無理して引きつった笑顔を浮かべる清香の頭をかき混ぜて、ため息を一つつく。こういうタイプは無理するなと言っても無理をするから、始末に悪い。だから、せめて英気を養ってやるくらいしか出来ない。

「……夕食作ってやる」

「え？」

清香はきよとした顔をする。

僕はこういうキャラじゃないんだけど？

「代わりに隠していることを話せ」

「あ……そう、ですね。もう、隠せるレベルじゃありませんね」

寂しげに笑う清香の顔は、夕焼けに染まって酷く脆く見えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6981a/>

不幸な僕と魔法少女

2010年12月5日15時06分発行